

アメリカの未来と2020年7月18日—第1号

契約の原始人たち：世の終わりにおけるモーセとエリヤ

Jeff Pippenger

2023-08-23

モーセとエリヤは預言的な象徴であり、文脈によってはそれぞれを単一の象徴として理解することも、両預言者を含む一つの象徴として理解することもできる。二人の証言によって事柄は確立されるが、黙示録11章では、モーセとエリヤは旧約と新約という二人の証人を表している。キリストの再臨を表す山上の変容において、この二重の象徴は、日曜法危機における十四万四千人（エリヤ）と殉教者（モーセ）の双方を表す。彼らは象徴として共に、ホレブのほら穴において、神の御品性の啓示であり、ラオデキヤの者をフィラデルフィアの者へと変える力を含むメッセージを「聞き」「読み」「守る」世の終わりの神の民を表している。やがて（ごく近いうちに）、愚かなラオデキヤのアドベンチストたちが、「見よ、花婿が来られる」との叫びに正しく応答するために必要な「油」を用いることがもはやできなくなる時が来る。

モーセは主に言った。「ご覧ください。あなたは私に、『この民を連れて上れ』と言われましたが、私と共に行く者を誰お遣わしになるのか、私には知らせてくださいませんでした。それなのにあなたは、『わたしはあなたを名で知っている。あなたはわたしの目に恵みを得ている』とも言われました。ですから今、もし私があなたの目に恵みを得ているのであれば、どうか今、あなたの道を私に示してください。そうすれば私はあなたを知り、あなたの目に恵みを得ることができます。どうか、この国民があなたの民であることをお心に留めてください。」主は言われた。「わたしの臨在はあなたと共に行き、わたしはあなたに休みを与える。」モーセは言った。「もしあなたの臨在が私と共に行かないのなら、どうかここから私たちを上らせないでください。私とあなたの民があなたの目に恵みを得ていることが、ここで何によって知られるのでしょうか。あなたが私たちと共に行かれることによるものではありませんか。その時、私とあなたの民は、地の表にあるすべての民から区別されるのです。」主はモーセに言われた。「あなたが言ったこのこともわたしは行おう。あなたはわたしの目に恵みを得ており、わたしはあなたを名で知っているからである。」

モーセは言った。「どうか、あなたの栄光をお見せください。」主は言われた。「わたしのあらゆる善をあなたの前を通らせ、あなたの前で主の名を告げよう。わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ。」また言われた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はだれもわたしを見て生きることはできないからである。」さらに主は言われた。「見よ、わたしのそばに一つの場所がある。あなたは岩の上に立ちなさい。わたしの栄光が通り過ぎるとき、わたしはあなたを岩の裂け目に置き、わたしが通り過ぎる間、わたしの手であなたを覆う。わたしの手を取りのけると、あなたはわたしの後ろ姿を見る。しかし、わたしの顔は見られない。」主はモーセに言われた。「最初のものと同じ石の板二枚を自分のために削りなさい。あなたが打ち砕いた最初の板にあった言葉を、わたしはその板に書き記す。朝のうちに備え、朝、シナイ山に上り、山の頂でわたしの前に姿を現しなさい。だれもあなたと一緒に上ってはならない。山全体にわたってだれも姿を見せてはならない。羊の群れも牛の群れ

も、この山の前で草を食べさせてはならない。」そこで彼は最初のものと同じ石の板二枚を削った。モーセは翌朝早く起き、主が命じられたとおりにシナイ山に上り、手に石の板二枚を取って行った。主は雲の中に降りて来て、そこで彼と共に立ち、主の名を宣言された。主は彼の前を通り過ぎながら宣言された。「主、主なる神、憐れみ深く情け深く、怒るのに遅く、いつくしみとまことに富み、千代にわたり恵みを保ち、とがと背きと罪を赦す。しかし有罪の者を決して無罪とはしない。父祖のとがを子らに、また子らの子らに、三代、四代にまで及ぼす。」

そこでモーセは急いで地にひれ伏して礼拝した。そして言った。「ああ主よ、もし今、私があなたの目に恵みを得ているのでしたら、どうかわが主が私たちのただ中をお進みください。というのも、この民はかたくなな民だからです。私たちのとがと罪をお赦しになり、私たちをあなたの嗣業としてお取りください。」主は言われた。「見よ、わたしは契約を結ぶ。わたしはあなたの民すべての前で、不思議なわざを行う。それは全地にも、どの国にもかつて行われたことのないものだ。あなたのいるすべての民は主のわざを見る。わたしがあなたと共に行うことは恐るべきことである。」

出エジプト記 33:12-34:10.

モーセは、世の終わりにおける神の民を代表している。彼らは、調査審判の「終わりの日々」に、神にご自身の「道」を示してくださるよう求め、そうして神を「知る」ことができるようにと願う者たちである。そしてその願いに応じて、神は「御臨在が彼らとともに行く」という約束と、神がその人々に「安息」を与えるという約束を含む答えをお与えになる。

主はこう言われる。道の分かれ道に立ち、見渡し、昔からの道、どこに良い道があるかを尋ね、その中を歩め。そうすれば、あなたがたは魂の安らぎを見いだす。しかし彼らは、「私たちはそこを歩まない」と言った。また、私はあなたがたの上に見張り人を立て、「ラッパの音に耳を傾けよ」と言った。しかし彼らは、「私たちは聞かない」と言った。エレミヤ書 6:16、17.

エレミヤは、『見ようとも』『聞き従おうとも』しないために、『良い道』を求めてその道を歩む者たちに約束された『安息』を受けない一群の人々を指摘している。その安息は、イザヤによって『憩い』と呼ばれている。

誰に知識を教えるというのか。誰に教えを悟らせるというのか。乳から離され、乳房から引き離された者たちに。というのは、戒めに戒め、戒めに戒め、規則に規則、規則に規則、ここに少し、そこに少し、でなければならぬからだ。彼は、どもる唇と異なる言葉でこの民に語る。彼は彼らに言われた、「これが、あなたがたが疲れた者を休ませる安息であり、これが潤いである」。しかし、彼らは聞こうとしなかった。だが主の言葉は、彼らにとって、戒めに戒め、戒めに戒め、規則に規則、規則に規則、ここに少し、そこに少し、となった。それは、彼らが行って、後ろに倒れ、砕かれ、罨にかかり、捕らえられるためであった。イザヤ書 28:9-13.

「安らぎ」と「憩い」は、最後の警告のメッセージが宣べ伝えられる間に注がれる後の雨を象徴している。

私は、第三天使のメッセージが終わろうとしている時を指し示された。神の力がその民の上に臨んでおり、彼らはその働きを成し遂げ、目前の試練の時に備えていた。彼

らは後の雨、すなわち主の御前からの潤いを受け、生ける証がよみがえっていた。最後の大きい警告は至る所に響き渡り、そのメッセージを受け入れない地の住民たちを奮い立たせ、激怒させた。『初期の著作』279頁

「『安息』あるいは『潤い』、すなわち『後の雨』の約束には、洞窟でモーセに与えられた、神の『臨在』がご自分の民とともに行くという約束が含まれている。」

その働きは、ペンテコステの日が起こったことと同様のものとなる。福音の開幕における聖霊の注ぎにおいて、尊い種を芽生えさせるために「初めの雨」が与えられたように、終わりにおいては、収穫を熟させるために「後の雨」が与えられる。『私たちは、主を知ることの追い求めるなら、やがて知るようになる。主の出て来られることは夜明けのように確かであり、主は雨のように、地に降る後の雨と初めの雨のように、私たちのところに来られる。』（ホセア 6:3）『だから、シオンの子らよ、喜べ。あなたがたの神、主のうちに楽しみ。主はあなたがたにほどよく初めの雨を与え、あなたがたのために雨、すなわち初めの雨と後の雨を降らせてくださる。』（ヨエル 2:23）『終わりの日に、神は言われる。わたしはわたしの霊をすべての肉なる者の上に注ぐ。』『そして、主の名を呼び求める者はだれでも救われる。』（使徒 2:17, 21）福音の偉大な働きは、その開幕を印づけた神の力の現れに劣る形で幕を閉じることはない。福音の開幕における「初めの雨」の注ぎで成就した預言は、その終わりにおける「後の雨」によって、再び成就するのである。ここに、使徒ペテロが次のように言ったときに待ち望んでいた「回復の時」がある。『それゆえ、悔い改めて立ち返りなさい。そうすれば、主の御前から回復の時が来るとき、あなたがたの罪は[調査審判において]ぬぐい去られる。神はイエスを遣わしてくださる。』（使徒 3:19-20）

神のしもべたちは、聖なる献身に照らされて顔を輝かせ、天からのメッセージを宣べ伝えるために、各地を急ぎ巡るだろう。地の至る所で、何千もの声によって、その警告が与えられる。奇跡が行われ、病人は癒され、しるしと不思議が信じる者たちに伴う。サタンもまた、偽りの奇跡をもって働き、人々の目の前で天から火を降らせることさえする（黙示録13:13）。こうして、地に住む者たちは、それぞれの立場を取るように迫られる。『大争闘』611、612。

終わりの日々における聖霊の注ぎは、福音宣教の初めにおける聖霊の注ぎによって型示されてきた。「諸教会に語られる御霊の言葉」を聞こうとしない者たちに対する「主の言葉」は、世の終わりを示すために、一つの預言的な歴史の系列に別の預言的な歴史の系列を重ね合わせるといふ預言の原則であった。これは、物事の終わりはその始まりによって示されるという原則にほかならない。この預言の原則は、愚かなラオデキアのセブンスデー・アドベンチストの人々によって退けられている。これを受け入れるなら、神は「知識を教える」ことができる。その知識こそ、ダニエルが終わりの時に増し加わると述べ、またホセアが、神の民がそれを拒むゆえに滅びると語る、まさにその同じ知識である。イザヤ書やエレミヤ書に描かれる、聞くことも見ることも拒む人々は、「回復」、すなわち、彼らが終わりの日の危機を安全に乗り越えられるようにと神がご自分の「終わりの日」の民に与えると約束された「安息」を、退ける。

神がモーセに宣言された「主の御名」（品性）とは、「主なる神は、憐れみ深く恵み深く、長く忍耐し、慈しみと真理に豊かである」ということであった。その方の品性は憐れ

みと真理である。その品性を表す真理は、常にその憐れみと結びついている。というのは、すべての人は罪を犯して神の栄光（品性）に達しない者であり、神がまず彼らに対して憐れみを施されない限り、誰もその真理を理解することができないからである。イエス・キリストがアルファでありオメガであるという真理は、不義と罪を神に赦された者たちによって認められ、守られる。その赦しは、調査審判の最終局面でなされる。このように憐れみを施してその罪を赦される人々を、彼はご自身の嗣業として取り、彼らと契約を結ばれる。

「この地上の歴史の終わりの日々に、戒めを守る神の民との契約は更新される。」 Review and Herald, 1914年2月26日。

モーセを含むすべての預言者は、神が十四万四千と定められた者たちと契約を新たにされる、調査審判の終わりの日々を指し示している。そしてその契約が立てられると、神は「わたしは全地にも、いかなる国にも、いまだかつて行われたことのない驚くべきわざを行う。あなたがいるすべての民は主のわざを見る。わたしがあなたとともに行うことは恐るべきことである」と言われる。

シナイ山とも呼ばれるホレブ山での、洞窟におけるモーセの体験は、神の民を相手にしたモーセの苦闘という文脈に位置づけられている。彼の苦闘は、神が彼に与えた務めを成し遂げることに関わるものだった。モーセは、世界に対する神のメッセージをめぐっても苦闘していた。主がモーセにご自身の栄光を現される直前、モーセは主に理を尽くして訴えた。すなわち、アロンの金の子牛の周りについて先ほどまで踊っていた反逆者たちをもし主が減ぼされるなら、その反逆者たちの滅びは、神の力を明らかにしていたメッセージを無にしてしまう、と。

主はモーセに言われた。「わたしはこの民を見た。見よ、これは頑固な民である。だから今は、わたしに任せよ。わたしの怒りを彼らに対して燃え上がらせ、彼らを滅ぼそう。そうしてわたしはあなたを大いなる国民とする。」しかしモーセは自分の神、主に嘆願して言った。「主よ、なぜあなたの怒りを、偉大な力と強い御手をもってエジプトの地から連れ出されたあなたの民に対して燃え上がらせておられるのですか。なぜエジプト人に、『彼は彼らに災いを加えるために連れ出し、山で彼らを殺し、地の面から彼らを滅ぼそうとしたのだ』と言わせることがありましょうか。激しい怒りをおさめ、あなたの民に下そうとしておられるこのわざわいを思い直してください。あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルを思い起こしてください。あなたはご自身にかけて彼らに誓い、彼らにこう仰せになりました、『わたしはあなたの子孫を天の星のように増やし、わたしが語っておいたこの全地をあなたの子孫に与え、彼らとはとこしえにそれを受け継ぐであろう』と。」そこで、主はご自分の民に下そうと告げられたそのわざわいを思い直された。出エジプト記 32章9-14節。

モーセの洞窟での経験には、彼が世界に向けて伝えるように任じられたメッセージが含まれている。主がモーセのそばを通り過ぎ、その御性質を宣言されたという証しは、神の反逆的な（ラオデキアの）民に関する内部的メッセージの文脈に置かれている。そして、エリヤの洞窟での経験の文脈は、イゼベル、すなわちアメリカ合衆国・教皇権・国際連合という三重連合との闘いの中に置かれている。一方は教会に向けた内部的メッセージを、もう一方は世界に向けた外部的メッセージを表しているが、モーセとエリヤという二

人の証人はホレブの同じ洞窟におり、世の終わりの洞窟においても両者がともに表されている。

アハブはエリヤが行ったすべてのこと、また彼が剣で預言者たちをみな殺したことを、イゼベルに告げた。するとイゼベルは使者をエリヤに送って言わせた。「もし私が、明日の今ごろまでに、あなたのいのちをあの者たちのひとりのいのちのようにしなければ、どうか神々が私にそのようにし、なおそれ以上のことをされるように。」彼はこれを知ると、立ち上がって命からがら逃げ、ユダに属するベエル・シェバに来て、従者をそこに残した。しかし彼自身は荒野へ一日の道のりを進み、来て、ねずの木の下に座った。そして自分のために死を願って言った。「もう十分です。主よ、今、私のいのちを取り去ってください。私は先祖たちにまさってはいませんから。」彼がねずの木の下の横になって眠っていると、見よ、ひとりの御使いが彼に触れて言った。「起きて、食べなさい。」彼が見ると、炭火で焼いたパンと、水のつぼが頭のそばにあった。彼は食べて飲み、また横になった。主の使いはふたたび、二度目に来て彼に触れ、言った。「起きて、食べなさい。あなたにはこの旅があまりにも遠いからだ。」そこで彼は起きて食べて飲み、その食べ物の力で四十日四十夜を歩き、神の山ホレブに着いた。彼はそこに来て洞穴に入り、そこで一夜を過ごした。すると見よ、主の言葉が彼に臨み、彼に言われた。「エリヤよ、あなたはここで何をしているのか。」彼は言った。「私は万軍の主のために非常に熱心でした。イスラエルの子らはあなたの契約を捨て、あなたの祭壇を取り壊し、あなたの預言者たちを剣で殺しました。残っているのはこの私ひとりです。彼らは私のいのちをねらい、これを取り去ろうとしています。」主は言われた。「外に出て、主の前に、山の上に立て。」すると見よ、主が通り過ぎられた。大いなる強い風が山々を裂き、主の前で岩を砕いた。しかし主は風の中にはおられなかった。風の後に地震が起こった。しかし主は地震の中にもおられなかった。地震の後に火があった。しかし主は火の中にもおられなかった。火の後に、かすかな細い声があった。エリヤはそれを聞くと、自分の顔を外套でおおい、出て行って、洞穴の入口に立った。すると、彼に声が臨んで言った。「エリヤよ、あなたはここで何をしているのか。」彼は言った。「私は万軍の主のために非常に熱心でした。イスラエルの子らはあなたの契約を捨て、あなたの祭壇を取り壊し、あなたの預言者たちを剣で殺しました。残っているのはこの私ひとりです。彼らは私のいのちをねらい、これを取り去ろうとしています。」主は彼に言われた。「行け。あなたの来た道を引き返して、ダマスコの荒野へ行け。そこに着いたら、ハザエルに油を注いでアラムの王とせよ。ニムシの子エフーに油を注いでイスラエルの王とせよ。アベル・メホラのシャファトの子エリシャに油を注いで、あなたに代わる預言者とせよ。ハザエルの剣を逃れる者をエフーが殺し、エフーの剣を逃れる者をエリシャが殺す。しかし、イスラエルにはなお七千人を残している。彼らはみなバアルにひざをかがめず、彼に口づけもしなかった者たちである。」 列王記上 19:1-18

エリヤの洞窟での経験は、メッセージそのものと、自分のメッセージと働きの効果についての彼自身の認識に関して、預言者が抱いた落胆を表している。モーセは神が示されたメッセージを擁護していたが、エリヤはそのメッセージをあきらめていた。扱っているのは同じメッセージだが、一方は教会の内側に関するもので、もう一方は教会の外側に関するものである点だけが異なる。それでも預言的には、両者は共に黙示録18章の二つから成るメッセージを示している。洞窟に関連するすべての真理について私が強調したいのは

、「終わりの日」において、どちらの場合にも表明されている落胆はメッセージとその効果をめぐるものだという事である。

モーセとエリヤは、主の「御言葉」である「声」を「聞き」「見る」者たちをともに象徴している。その「御言葉」は、いつくしみとまことという御性質を表している。詩篇記者もまた、神のいつくしみ、すなわちその御性質を示して下さるようお願い求めている。その「いつくしみ」を見るために、詩篇記者は、御霊が諸教会に言われることを「聞く」と約束する。

聖歌隊長へ。コラの子らのための詩。主よ、あなたはあなたの地に恵みを施され、ヤコブの捕囚を引き戻し〔反転させ〕られました。
あなたはあなたの民の不義を赦し、そのすべての罪を覆われました。セラ。
あなたは御怒りのすべてを取り去り、あなたの怒りの激しさから身を翻されました。
私たちの救いの神よ、私たちを立ち帰らせ、私たちへのあなたの怒りをやめてください。あなたはいつまでも私たちに怒っておられるのでしょうか。代々にわたってあなたの怒りを引き延ばされるのでしょうか。もう一度私たちを生かしてはくさいませんか。そうすれば、あなたの民はあなたにあって喜びます。
主よ、あなたの慈しみを私たちに示し、あなたの救いをお与えください。神である主が何を語られるか、私は聞きます。主はその民と、その聖徒たちに平和を語られるからです。ただ、彼らが再び愚かさに戻りませんように。
まことに、主を恐れる者たちには御救いが近く、栄光が私たちの地に宿ります。
恵みとまことは互いに出会い、義と平和は互いに口づけしました。
まことは地から芽生え、義は天から見下ろします。
まことに、主は良いものをお与えになり、私たちの地はその産物を実らせます。
義は主の前を歩き、私たちをその足跡の道に備えます。詩篇85:1-13。

「『慈しみと真実』（そして「真実」とは、これまで言及してきたヘブライ語の 'emet' を指します）は、義と平和を生み出し、『口づけしました』。両者は結ばれています。詩編作者は、神がご自分の『民』の『咎を赦した』調査的審判の最後の日々に、自らの歌を位置づけています。願いは、主がご自分の民を『よみがえらせる』ことです。」

聖霊の働きのもとに、リバイバルと改革が起こらなければならない。リバイバルと改革は二つの異なる事柄である。リバイバルとは、霊的いのちの回復、知性と心の力の活性化、霊的死からの復活を意味する。改革とは、再編成、思想や理論、習慣や実践の変化を意味する。改革は、聖霊によるリバイバルと結びついていなければ、義の良い実を結ぶことはない。リバイバルと改革は、それぞれ委ねられた働きをなし、この働きを行うにあたって互いに調和しなければならない。Selected Messages, 第1巻, 128.

詩篇記者が求めている「リバイバル」は、自分が死んでいることを知っている者の願いであることを示している。詩篇記者が求めるこのリバイバルは、ラオデキヤ人にとっては願い出るのが非常に難しい。というのも、ラオデキヤ人は自分が霊的に死んでいることに気づいていないからである。もし死んでいないのなら、よみがえらされる必要はない。リバイバルは、「神である主が語られることを聞く」ことに同意することで実現するのであり、聖霊が私たちのうちに住まわれるときにもたらされるそのリバイバルを確かなも

のことに、ほかのどんな働きも優先してはならない。

「私たちにとって最も大きく、最も切迫した必要は、私たちの間に真の敬虔さの復興が起こることである。これを求めることは、私たちの第一の務めであるべきだ。」『セレクトッド・メッセージ』第1巻、121ページ。

黙示録について、ホワイト姉妹は次のように述べている。

「私たちが一つの民として、この本が私たちにとって何を意味するのかを理解するとき、私たちの間に大いなるリバイバルが起こるだろう。」『Testimonies to Ministers』113ページ。

「revival」という語は、命を生き返らせることと定義される。十四万四千人のうちに選ばれる者は、まず自分が死んでおり、よみがえりを必要としていることを認めなければならない。十四万四千人が死んでいるという事実は、猶予期間が閉じる直前に封印が解かれるメッセージの重要な要素である。この真理については、さらに多く語るべきことがある。彼らをよみがえらせるのは、神が彼らを「よみがえらせ」、ご自身の義を与えるときに彼らに差し伸べる「憐れみ」である。彼らをよみがえらせるのは、イエスがアルファでありオメガであるという真理であり、この理解は、すべての理解にまさる「平安」を彼らの内に生み出す。約束は、「真理」が「地から生え出る」ということである。「真理」として表される、すなわちアルファでありオメガであるそのメッセージは、「地から」生え出るので、アメリカ合衆国に由来する。初めのメッセージはアメリカ合衆国から来たし、終わりのメッセージも同じ場所から生え出る。

神の「洞窟の人々」が象徴であるという文脈において、象徴的な洞窟にいた他の預言者たちについても考察する。イエスはバプテスマのヨハネをエリヤだと認めたが、イエスが来るべきメシアかどうかを知る必要に迫られたとき、ヨハネは獄中にいた。彼はイエスの真の姿を知る必要があった。彼は、自分が宣べ伝えてきたメッセージと、イエスが引き続き宣べ伝えておられたメッセージが真実のメッセージであるかどうかを知る必要があった。彼は弟子たちを遣わしてイエスにその問いをさせたが、イエスはその問いに直接は答えず、彼らにご自身の栄光を示された。

こうしてその日は過ぎていき、ヨハネの弟子たちはそのすべてを見聞きしていた。ついにイエスは彼らを見もとに呼び、行って見聞きしたことをヨハネに告げるよう命じ、さらにこう付け加えられた。「だれでも、わたしにつまずくことのない者は幸いである。」（ルカ7章23節、R. V.）彼の神性の証拠は、苦しむ人類の必要に即していることのうちに見られた。彼の栄光は、私たちの卑しい境遇にまで身を低くされたところに示された。

弟子たちはその伝言を携えて行き、それで十分であった。ヨハネはメシアに関する預言を思い起こした。「主はわたしに油を注ぎ、柔和な者に良き知らせを告げるために、わたしを遣わされた。心の砕かれた者を包み、捕らわれ人に解放を、縛られている者に獄の開放を告げ、主の恵みの年を告げるために。」イザヤ書61章1、2節。キリストの御業は、彼がメシアであることを宣言しただけでなく、その御国がどのような仕方で打ち立てられるのかも示した。荒野でエリヤに臨んだのと同じ真理が、ヨハネにも開かれた。すなわち「主の前で大いなる強い風が山を裂き、岩を砕いた。しかし主は

風の中にはおられなかった。風の後に地震があったが、主は地震の中にもおられなかった。地震の後に火があったが、主は火の中にもおられなかった。」そして火の後に、神は預言者に「静かな細い声」で語られた。列王記上19章11、12節。こうしてイエスは、剣戟の響きや王座や王国の覆滅によってではなく、憐れみと自己犠牲の生涯を通して人々の心に語りかけることによって、その御業をなさるのであった。『時代の願い』 217.

神の力は、御言葉を通して伝えられる。それは「人の心」に届けられる。

それが「かすかな細い声」の教訓であった。しかし、エリヤのメッセージは、神の民の外にある勢力を特定する外面的なメッセージである。キリストはエリヤに、「終わりの日」には力は御言葉のうちにあるのだと語っておられたが、破壊的な風・地震・火によって象徴される「武力の衝突と王座および諸王国の転覆」は、神の民が直面することになる、黙示録に描かれた外的勢力の三つを表している。

破壊的な「風」は、聖書の預言においてイスラムを象徴している。

「地震」はフランス革命の反乱と無政府状態である。

「火」はソドムとゴモラにもたらされた滅びである。エリヤは洞穴にたどり着くために教皇権から逃れていたのだから、主は彼に、世の終わりの危機を形作るあらゆる悪しき勢力にもかかわらず、神の力が見出されるのは「かすかな細い声」のうちなのだと示された。

モーセ、エリヤ、そしてバプテスマのヨハネは皆、ほら穴において神の御性質を見たと言っている。「ほら穴」こそが、邪悪で姦淫の世代に与えられる唯一のしるしである。イエスは「姦淫で邪悪な世代」について語られたが、それは調査審判の「終わりの時代」の世代である。その世代へのしるしは、鯨の腹という「ほら穴」の中で三日間を過ごした預言者ヨナであった。

群衆が大勢集まってきたとき、彼は言い始めた。「この世代は悪い世代だ。しるしを求めている。しかし、この世代には、預言者ヨナのしるしのほかには何のしるしも与えられない。ヨナがニネベの人々にとってしるしであったように、人の子もまたこの世代にとってしるしとなるのだ。」ルカによる福音書 11章29、30節

ヨナは三日三晩、鯨の腹の中にいた。同様に、イエスも三日の間、墓の中にいた。ヨナはしるしであり、イエスもまたそうである。彼らは復活のしるしを表している。復活はもちろん、死の後に起こる。

そのとき、律法学者とパリサイ人のうちのある者たちが答えて言った。「先生、私たちはあなたからのしるしを見たいのです。」しかし、彼は彼らに答えて言われた。「邪悪で姦淫の世代はしるしを求め。しかし、預言者ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられない。というのは、ヨナが三日三晩鯨の腹の中にいたように、人の子も三日三晩地の中にいるであろう。ニネベの人々はこの世代とともに裁きの時に立ち上がってこれを罪に定めるであろう。彼らはヨナの宣教によって悔い改めたからである。見よ、ここにはヨナにまさる者がいる。」マタイ12:38-41

もし歴史の反復という原則を、すべての聖なる歴史が世の終わりを指し示しているという事実とあわせて理解するならば、ヨナと、キリストの死・埋葬・復活こそが、今の神の民への「しるし」であり、同時にメッセージでもある。ヨナが鯨の腹から吐き出されたこと

きにメッセージを宣べ伝えたように、天使がキリストがいた洞窟から石を取りのけたとき、キリストの復活のメッセージも直ちに宣べ伝えられた。モーセ、エリヤ、ヨナ、そしてキリストに代表される者たちは、「終わりの日」の神の民だけでなく、彼らそれぞれが与えたメッセージも象徴している。

ヨナのしるしには、キリストのあわれみ深い御性質があらわされる洞窟での体験が含まれている。イエスがエリヤに示されたのと同じあわれみが、メッセージを宣べ伝える責任から逃げていたヨナにも注がれた。ヨナについて語るべきことはまだ多いが、今はほかの点を取り上げる必要がある。

洞窟は、ほかにもいろいろな意味を持つが、死と復活を象徴している。終わりの時代における神の契約の民は、複数の証人によって、いったん死に、そして復活した者であると認められてきた。もちろん、クリスチャンは神の御国を見るために新しく生まれなければならない、これは古い肉の人の死を表しているが、預言的にはそれ以上の意味がある。それは、メッセージの伝達が途中で遮られることを語っている。エリヤはメッセージを宣べ伝えるのをやめ、ヨナはメッセージを宣べ伝えることから逃げた。ヨハネは投獄され、処刑された。イエスは十字架につけられた。

ゆえに「ヨナのしるし」は単に死と復活についてではなく、メッセージの死と復活についてであり、神の言葉において象徴されているすべてのメッセージは、父なる神からイエスに与えられ、次いでガブリエルに、さらに預言者に渡され、預言者がそれを書き記して諸教会に送った、あの最後の警告のメッセージを表している。神は、モーセの洞窟での体験において、そのメッセージを終わらせて最初からやり直すことも厭わなかった。エリヤは使者としての働きを終え、洞窟へ逃げ込んだ。ヨナはタルシシュへ逃げた。バプテスマのヨハネは殺され、イエスもまたそうであった。これらすべての証しは、黙示録に持ち寄られ、互いに整合させられるべきである。ダニエル書と黙示録は二つの書物だが、「イエスの証し」は、それらが同時に一つの書でもあることを示している。これらは聖書と同じ特質を備えている。二つの書が一つの書を成し、二人の著者が二人の証人を表している。

バビロン、そしてその後メド・ペルシャの捕囚であったダニエルは、獅子の穴に投げ込まれたとき象徴的に死んだ。ヨナは鯨に食べられたとき象徴的に死んだ。黙示録のヨハネは、煮えたぎる油に投げ込まれたとき象徴的に死んだ。ウィリアム・ミラーは死んだが、義人の復活のために天使たちが彼の墓で待っているという約束が与えられている。ミニストリー「フューチャー・フォー・アメリカ」は2020年7月18日に象徴的に死んだ。

最終警告のメッセージは、教皇権の致命的な傷が癒されるという文脈に置かれている。傷の癒しは、黙示録13章と17章の特定の主題である。致命的な傷が癒されると、復活した教皇権は黙示録17章に示されている第八の王国となる。そこでは、それは「第八であり、すなわち七つのうちの一つである」とされている。八は復活の象徴である。というのも、契約関係の印である割礼は、男児が生まれてから八日目に行われることになっていたからである。その儀式はキリスト教の時代には洗礼に置き換えられ、洗礼はキリストの死、埋葬、復活を表している。キリストは七日目の翌日に復活した。したがって、預言的には八日目に復活したことになる。一千年の休息の後、新しくされた地は第八の千年期に復活す

る.